山田道の調査

―第149-9次

1　はじめに

本調査は、大和平野国営東部幹線水路等改修工事（山田サイホン）に伴う事前調査として実施した。調査地は、推定山田道（県道桜井明日香吉野線）沿い、飛鳥資料館から東へ150mほどの地点であり、調査区は県道直下（A区）と、その西側の隣地（B区）の２箇所にまたがる（図134）。調査面積は、A区85.29㎡、B区34.06㎡の合計119.35㎡。調査期間は、A区が2008年１月25日～２月６日、B区が３月３日～11日である。

基本層序は、上層から順に、現道路ならびに旧道路の舗装およびバラス敷が各２層、褐色粘質土、青灰色粘質土（ともに現代の造成土）、浅黄色粘質土、青灰色粘質土（ともに旧流路上と周辺を埋める近代の整地土）、青灰色砂層と青灰色粘質土の互層（旧流路堆積土）となる。流路跡の検出面の標高は、A区105.8m、B区で104.5m前後である。

2　検出遺構

A区　埋設管等により調査区の約2/3が削平されていた。残る1/3についても古代の遺構面は認められず、流路跡SD380が１条確認されたのみである（図136）。SD380は南から北の方向に走向し、南北長4.4m分が遺存していた。流路の東西幅に関しては、埋設管による攪乱のため不明である。流路内に堆積した青灰色砂層中に近世～近代の磁器片や土師質皿などが混入することから、近世以降の流路とみられる。また、この砂層からは土器、陶磁器、丸瓦・平瓦を主とする瓦片が数多く出土したが、いずれもローリングを受け、摩滅している。

図134　第149-9次調査位置図　1：4000

また、SD380に伴う護岸とみられる痕跡を確認した。護岸跡を確認した部分は湧水が激しく、十分に記録するに至らなかった。ただ、現場での観察によれば、護岸は流路肩に沿って、前部には枠杭間に伽杭、後部には控杭間に伽杭と２列の杭列を設け、それぞれ枠杭および控杭をつなぐ横貫を上下２段に配していた。前部と後部の間、すなわち枠内からは、いわゆる榛原石や飛鳥石の礫が多く確認されたので、枠内には礫を詰めていたようである。これらの特徴からすると、今回確認された護岸は、森田克行のいう「枠工法」で構築された可能性が高い（森田克行「近世初頭の枠工法護岸施設」『季刊考古学』102、2008）。杭は樹皮がついたままの材の先端を鋭角に削り込んでいた。横貫は木の前後を切り落としただけの簡素な構造である。しがらみや縦貫が存在した可能性もあるが、遺存状態が良好でないため確認できなかった。また、枠内から瓦が比較的多く出土したことから、枠内は礫だけでなく、流路に沈んでいた瓦も礫とともに詰めて

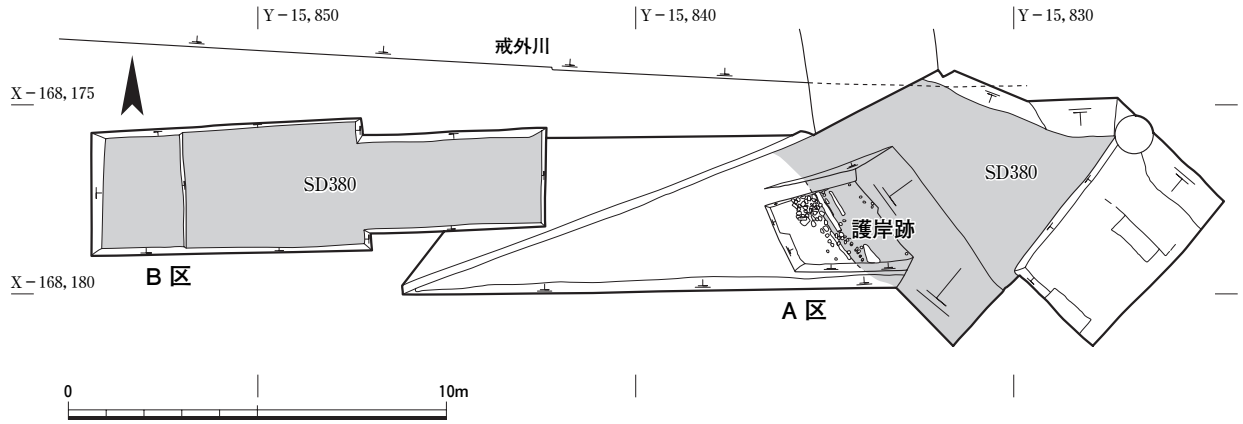

図135　第149-9次調査遺構図　1：200

図136　A区SD380（東から）

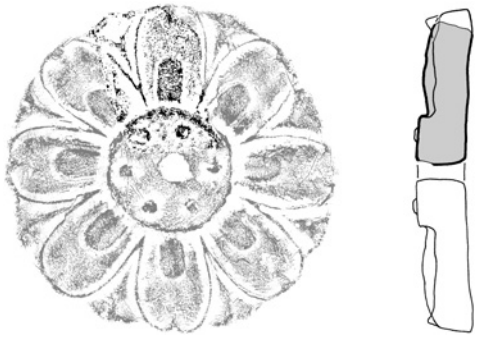

図137　第149-9次調査出土垂木先瓦　1：4

いた可能性もある。さらに護岸の外側、SD380の縁に沿って幅70㎝あまりにわたって、榛原石を貼石状に敷き詰めていた。これも護岸と一連の造作と考えられる。

B区　A区から続くとみられるSD380と全く同じ青灰色砂の堆積を、調査区全域で深さ１ｍあまり確認した。流路の肩部や護岸跡が確認できなかったため、規模や流れの方向は特定できないが、A区での流れの方向などを勘案すると、B区の青灰色砂もSD380と推定される。となるとSD380は、A区の北側付近で西側へカーブし、B区を通り西側へ流れていたと推定される。A区と同じく、この青灰色砂層からローリングを受けた瓦片と土器片が多く出土した。これらの出土遺物は、調査区の東側に偏して出土する傾向がある。

なお、B区の青灰色砂層は微細遺物を回収する目的で持ち帰り、水洗洗浄をおこなった。その結果、瓦器椀、不明木製品、瓦などの小片を整理箱３箱分採集できた。

3　出土遺物

土器　SD380に堆積した青灰色砂層から、土器片が整理箱１箱分出土した。土師器杯・甕、須恵器杯・甕、土師質皿、瓦器椀、陶器、磁器からなり、いずれもローリングにより摩滅している。土師器・須恵器は７世紀以降とみられるが、ごくわずかしか出土せず、出土土器の大多数は中世の瓦器椀片と土師質皿片からなる。これに近世・近代の陶磁器片が若干混じるため、「枠工法」による護岸の工法をとることとあわせ、SD380の時期推定の根拠とした。　**（青木　敬）**

瓦類　SD380に堆積した青灰色砂層から、多量の瓦類が出土した。その内訳は、重弧文軒平瓦１点、垂木先瓦１点、丸瓦151点（34.9kg）、平瓦504点（132.3kg）である。これらはすべて古代の瓦であり、凸面に残された叩き目痕や胎土の特徴などから、山田寺の所用瓦と考えられる。図137は、単弁八弁蓮華文の垂木先瓦で、山田寺の垂木先瓦E種にあたる（奈文研『山田寺跡』2002）。E種の中房側縁には、金銅製の中房飾り金具をとりつけるための「かしめ穴」をもつものが多いが、本資料にはない。全体に摩滅が著しいものの、裏面にはケズリ痕が残る。胎土に長石・石英を多く含み、焼成は軟質、色調は灰色を呈す。またE種は、山田寺金堂周辺から多く出土しており、金堂所用瓦である可能性が高い。　**（石田由紀子）**

4　調査成果

第149-9次調査の成果は、次のように要約できる。

第一に、近世から近代にかけての小規模流路における護岸が多少なりとも明らかになった。確認された護岸の工法は、近世初頭に始まったと考えられる「枠工法」でつくられた可能性が高く、出土遺物からみたSD380の時期推定とも矛盾しない。また、護岸外に貼石状の施設が存在し、石材は榛原石を使用していたことも判明した。

第二に、SD380から出土した垂木先瓦E種は、これまで山田寺金堂周辺から集中的に出土していることから、金堂に使用された可能性が高い。古代の瓦類は、中世の瓦器椀などと共に出土していることから、中世における山田寺の廃絶時期とも関わる可能性がでてきた。すなわち、山田寺の廃絶時期をうかがわせる材料が得られた点が成果である。

今回、阿倍山田道や古代の遺構などは確認されなかったが、山田寺関連の瓦などが多数出土したことから、周辺地域の旧流路などに多くの遺物が、なお存在する可能性が高い。　**（青木）**